景德王代・王子金泰廉の日本派遣と新羅国内政治

——派遣事情を中心に——

近 藤 浩 一

目 次

はじめに

1. 景德王代の王権強化と対唐政策
2. 反専制主義勢力の動向と対日外交
3. 景德王の懐柔策と金泰廉の日本派遣
 - (1) 金思仁の活動と対日外交
 - (2) 派遣目的と景德王の対応

おわりに

キーワード：景德王，金泰廉，日本派遣，新羅国内政治，反専制主義勢力

はじめに

統一期である新羅中代（654～779）の対日外交史は、これまで多様な角度から研究された¹⁾。そうした研究において最も注目された史料のひとつが、次の『続日本紀』巻18天平勝宝4年（752）閏3月己巳条である。

己巳，大宰府奏，新羅王子韓阿浪金泰廉，貢調使大使金暄及送王子使金弼言等七百余入，乘船七泊。（『続日本紀』巻18天平勝宝4年〈752〉閏3月己巳条）

景德王11年（752）は、羅日両国の外交が743年に断絶されて以後、新羅によって約9年ぶりに再開されたのであった。さらにこの時は、新羅は以前と異なり日本に、韓（大）阿浪の官位を持つ王子金泰廉及び、貢調大使金暄・送王子使金弼言等の一行とともに700人余を7隻の船で派遣している²⁾。

王子金泰廉一行が日本に派遣された理由については、既存の研究でもいくつかの見解が提起された。特に、日本古代の対外関係史の分野で日本の国内事情との関係から研究が始められ、新羅が日本にわざわざ大使節団を派遣し朝貢した意義が浮き彫りにされた³⁾。その中では、総勢700人余という規模を日本に派遣した理由も論じられている。

まず、上の史料以外に同時代史料である「買新羅物解」や「正倉院宝物新羅氈貼布記」を手がかりに、この時の新羅の対日外交は交易活動に主たる目的が置かれていたという見解が出さ

れた⁴⁾。また、景德王代の対日外交について、渤海を中心とした東アジア情勢との関係から検討した研究成果もある。ここでは、景德王11年(752)頃は新羅と渤海が敵対関係にあり、新羅は渤海への牽制を強化するため日本に王子以下の大規模使節団を派遣したという⁵⁾。

さらに上の見解に加えて、752年段階の羅日関係に政治的意味を見い出そうとする李成市氏の研究がある⁶⁾。すなわち李成市氏は、新羅が700人規模の金泰廉一行を派遣できたのは、両国の間で周到な準備があり日本側の要請に新羅が応じたためであったという⁷⁾。また新羅の立場にも触れており、手工業生産の発展で大量に生産された毛氈などの製品を日本で交易する必要性と、渤海との関係悪化に対応する保全策を日本に求めようとしたことを指摘している。ともあれ、大規模使節団である金泰廉の派遣を単純に交易(経済的関係)と結びつけるのではなく、その背後に潜む羅日両国の外交問題に目を向けて検討した点は極めて注目される。

その他にも、注2)-④の記録を根拠に新羅王子金泰廉一行を、新羅の景德王が日本の要請を受けて752年4月に開催される東大寺の大仏開眼を祝うために派遣した諸寺参拝団であったとみなす見解もある⁸⁾。ここでは、大規模使節団の派遣について、盧遮那仏参拝という特別な事情に伴い羅日間に事前の約束があったとしている。

このように日韓の多くの研究者は、景德王代における新羅王子金泰廉の日本派遣事情について様々な側面から検討してきたと言える。しかし、既存の研究では、日本の国内事情や渤海との関係に比重が置かれた反面、派遣を決めた主体である新羅の国内政治にはほとんど関心が払われなかった⁹⁾。すなわち、使節団が派遣された理由に前者の外的な要因があったとしても、それを決断した新羅の景德王をとりまく政治状況が何より直接作用したのではないか。換言すれば、使節団の派遣目的が既存の研究で最も強調されたような交易などにあったとしても、景德王代の国内事情と深い関係にあったと考えられる。

本稿では、景德王11年(752)に王子金泰廉など700人余が日本に派遣された事情を、景德王代における新羅国内の政治状況の中でいささか検討してみたい。

1. 景德王代の王権強化と対唐政策

新羅中代は、専制王権を確立した王権及びそれを支持する王党派とそれに対抗する真骨貴族たちの反専制主義勢力との対立・葛藤の中で、国内政治が展開していった時期である¹⁰⁾。

本稿で取り上げる景德王(在位742～765)も、彼の即位を支援した王党派と共に積極的な王権強化策を実施した¹¹⁾。前王の孝成王の同母弟である景德王は、前王に嗣子がなかったため太子に任命され即位することができたが、そのため王党派にとっては、当初より反対派を一掃して王権を強化する必要に迫られていた。その最初の仕掛けが、景德王の即位と同時に彼の妃である三毛夫人を出宮させたことであった¹²⁾。三毛夫人は、金順貞の娘であり、760年以降反専制主義的な態度を強くとった金邕(金順貞の孫)とも親族関係にあった。そして、景德王は三毛

夫人を出宮させたのち、在位2年(743)に金義忠の娘の満月夫人を後妃に迎えたのであった。

この三毛夫人の出宮理由は嫡子が無かったから¹³⁾というが、これは王位継承者の確保とも直接関わる問題であり、反対派勢力の弱体化をねらった王党派の推進した王権強化策のひとつであった¹⁴⁾。『三国遺事』巻2紀異2景德王忠談師表訓大徳条には、景德王が嫡子の誕生を懇願する様子が記されており、彼は頑なに自身の直系に王位を継がせようとしていたことがわかる¹⁵⁾。加えて、景德王4年(745)に東宮を修繕し、11年(752)には東宮衙官を置いているのも、王位継承権を確保し王権強化を成し遂げようという姿勢のあらわれである。

また、景德王を中心とする王党派は、聖徳王末年から積極的に推進された対唐外交を一層強化することによって、王権強化を成し遂げようとしたのであった。景德王代において唐と緊密な友好関係を展開したことは、景德王への冊封記事¹⁶⁾や在位24年間に11回にわたり唐に使節を派遣した点¹⁷⁾から窺い知られる。なお、景德王の後妃になった満月夫人が聖徳王代の対唐外交を推進した金義忠の娘であったこともこれを裏付ける¹⁸⁾。

さらに景德王は、唐との関係による漢化政策にもとづき官制改革を断行し、この過程で彼の政策に反対する不満貴族勢力を抑圧していった¹⁹⁾。具体的には、6年(747)に中侍を侍中に改名したのを契機に漢化政策が始められ、一端はやや下火になったものの16年(757)に地方郡県の名を漢式に改定して以後、一層本格的に遂行されていった。この背景には、対唐政策を積極的に推進する立場をとる王党派の金信忠が757年に上大等に任命されたことも関連があったようである。ただ、760年に前述の金邕が侍中に任命されると、王党派の漢化政策はひとまず終息した²⁰⁾。

ところで、景德王代に鑄造が始められ恵恭王代に完成した「聖徳大王神鍾銘」によると、景德王は父の聖徳王の威徳を追慕する心情が頗る厚かったことがわかる²¹⁾。周知のように聖徳王代は、対外関係では、唐から涇江以南の土地を得て、唐に送り出した留学生・留学僧を通じて政治・文化が繁栄した時代であった²²⁾。またこれを背景に、対日外交では新羅自身を王城国と称していた²³⁾。何よりこの鍾銘には、聖徳王代を「四十余年、臨邦勤政一無干戈驚擾百姓、所以四方隣国万里帰賓」と表しており、聖徳王は唐との関係(対唐政策)を通じて日本など周辺諸国より優位な位置にあったことを明白にしていたと言える。

とすれば、聖徳王の政治を理想とした景德王は、対外政策においても聖徳王代の政策をそのまま継承した可能性が高い。ここで改めて検討したいのは、王子金泰廉一行が日本に派遣された景德王11年(752)頃の新羅の国内情勢と対日外交の関係である。以上のように景德王代は、対唐政策にもとづき中華意識を高揚させた時期であった。これらを念頭に置くならば、752年段階において、新羅(景德王)が交易などを推進したからとは言え、既存の研究のように金泰廉を日本に朝貢目的から派遣したとは考えられないのではないか。このことは、次の『続日本紀』にみられる日本国内で渤海国使と新羅使王子がとった行動を比較した記録からも確かめられる。

又新羅朝貢使王子泰廉入京之日，官使宣命，賜以迎馬。客徒斂轡，馬上答謝。但渤海国使，皆悉下馬，再拜舞蹈。今領唐客，准拋何例者。（『続日本紀』卷35宝亀10年〈779〉4月辛卯条）

これによれば、渤海国使はすべて馬から下り、再拜し舞蹈して謝意をあらわしているのに対して、王子金泰廉をはじめとする新羅客徒は、手綱を引き締めて馬上から答謝している。このことは、金泰廉自身が日本に対して朝貢意識を全く持っていなかったことを窺い知らせる。

いずれにしても、まず、景德王を中心とする王党派が積極的に日本に朝貢使節を派遣したとは考えられない。次に、王子金泰廉をはじめとする700人余を、既存の見解どおり交易や渤海牽制などの諸目的から日本に派遣された使節団と考えても、新羅の国内事情に合わせて検討しなければならないことを伝えている。

2. 反専制主義勢力の動向と対日外交

上では、景德王代の国内政治とこれに伴う外交認識について簡単に論じた。では、対日外交を実施したのはいかなる人々であったのか。景德王代の政治状況を考慮すれば、景德王ら王党派の動向とともに、これに不満を持っていた真骨貴族たちである反専制主義勢力の動向が喚起される。ここで注目しようと思うのも、後者の反専制主義勢力の動向である。それを最も代表する人物は金邕であるが、彼の活動を論じた既存の研究によって、760年に侍中に任命されると、王党派に代わり反専制主義勢力の影響力が増大したことが明らかにされている²⁴⁾。

ところで、このような動きは、それ以前から始まっていたとみられる。次の『三国遺事』の記録は、その可能性を示唆する。

新羅第三十五景大王，以天十三甲午，鑄皇龍寺鐘。長一丈三寸，厚九寸，入重四十九万七千五百八十一斤。施主孝貞伊王三毛夫人，匠人里上宅下典。（『三国遺事』卷3塔像4皇龍寺鐘芬皇寺藥師奉徳寺鐘）

上の記録によれば、景德王13年（754）に皇龍寺鐘を鑄造した際の施主は、孝貞伊王と三毛夫人であった。三毛夫人は、先に指摘したように金順貞の娘で金邕の親族であって、景德王妃から出宮させられていた。さらに、その三毛夫人と何らかの関係にあった孝貞も、反専制主義勢力のひとりであったと推察される²⁵⁾。

また、皇龍寺鐘における鑄造の動機を述べた記録はないが、彼らが多量の銅などを喜捨している点は注目される。この鐘の重さは49万斤であったとするが、景德王ら新羅王権が鑄造した聖徳大王神鐘でも12万斤であることを比べても、相当な費用と時間を要したことが容易に

わかる²⁶⁾。この鐘の铸造は、反専制主義勢力（真骨貴族）の経済力を十分示唆している。さらに言えば、反専制主義勢力は、王権の専制化に対抗するほどの財力を持っていたことを、皇龍寺鐘を铸造することを通して、公に知らせようとしたのではないか。したがって、景德王代に三毛夫人と孝貞が施主となり皇龍寺鐘を铸造したことは、専制王権に対する特別な意識を含んでいたものと考えられる。

それならば、その2年前の景德王11年（752）の対日外交における使節団派遣も、反専制主義勢力の動向と密接に関係していたとみてとれる。これに関連して『続日本紀』宝亀5年（774）3月条²⁷⁾をみれば、三毛夫人の父金順貞とその孫の金邕が親日外交を展開している姿を確認することができる²⁸⁾。加えて『続日本紀』神亀3年（726）7月戊子条では、金順貞に対し、新羅使節が彼の死去（聖徳王24年〈725〉）を日本に伝えたと、すぐに日本側が哀悼の意を表したとしている。すなわち『続日本紀』の記録は、半世紀の歳月が流れた恵恭王10年（774）においても、日本側が8世紀前半の金順貞との縁を十分認識していたことを伝えている²⁹⁾。したがって金順貞は、対唐政策を遂行していた治世下でも、唐との関係だけでなく日本との関係を重視していたことが窺い知られる。

そして何より、金順貞の外交姿勢（親日外交）が脈絡と孫の金邕まで継承されていた点が注目される。これは、対日外交が反専制主義勢力の動向と密接な関係を持っており、王党派が推進する対唐政策（漢化政策）に対抗する手段としてそれが利用されていたことを示唆する。つまり、金邕が本格的に政治の舞台に登場したのは景德王19年（760）であったが、三毛夫人や孝貞などの例から知りえたように、それ以前から始まっていた反専制主義勢力の動きが、景德王11年（752）の対日外交を実現させたと考えられる。

翻って、王子金泰廉をはじめとする700人余の日本派遣を、景德王を中心とする王党派が推進したとは考えられない点がいくつか存在する。まず、次の景德王12年（753）の記録は、王党派勢力の対日外交に対する認識を物語っている。

十二年秋八月、日本国使至、慢而无礼、王不见之。（『三国史記』卷9景德王12年〈753〉秋8月条）

これは、752年の返礼として日本使³⁰⁾が新羅に派遣されて来たときの出来事であるが、彼らの態度が傲慢で無礼であるという理由から、新羅王は面会せずに送り帰したという。このことは、景德王が日本との外交に対して好意的でなかったことを指し示すものである³¹⁾。前述のように、王党派勢力は対唐・漢化政策とそれにもとづく官制改革によって、王権強化を実現しようとしたことを一層想起させてくれる。

また直接指し示すものでないが、『続日本紀』天平勝宝6年（754）正月丙寅条にみえる大伴古麻呂による唐からの帰国報告によれば、753年に唐朝廷で日本使が新羅使節との間で席次争

いをしたことを伝える³²⁾。これも、752年頃の新羅と日本の外交関係が友好的でなかったことを暗示させる。この事件については、既存の研究では日本史の立場から日本が新羅より上席に着くことができたことが評価されたが、唐が当初日本より新羅をそこに置いたということは、唐朝廷では元々は新羅との関係をより重視していたことがわかる。

ともあれ、新羅王権は対日外交には強硬な姿勢で臨んでおり、752年以降、金邕が侍中に就任する760年（景德王19）までの間日本に使節を派遣しなかったのも、そうした対日認識のあらわれであったと考えられる。

3. 景德王の懐柔策と金泰廉の日本派遣

(1) 金思仁の活動と対日外交

以上、景德王11年（752）の対日外交は、景德王自身が積極的に推進したのではなく、景德王に対抗する反専制主義勢力の要請であった可能性が高いことを指摘した。

さて、700人余という大規模使節団の派遣を可能とした背景には、李成市氏が指摘するように羅日両国の間に相応の準備があったことは相違ない。ただ李成市氏は、派遣が実現された理由として、日本側の立場から記載されている注2) にあげた史料のみを根拠に、新羅使節一行がその前に日本側が事細かに要請した蕃国の遣使に似合う格式と規模を受け入れたことによるとしている³³⁾。すなわち日本側の事情を重視しているが、そうした影響があったとしても、大使節団を派遣した新羅側にそれ相応の主體的な事情と準備がなければ、実現に至ることはなかったことを勘案すべきである。とすれば、752年の使節団派遣が、また一方的な反専制主義勢力の動向のみによって成し遂げられたとも言いがたくなる。そこには、やはり権力の中核にいた人物による何らかの協力があったと推察される。日本派遣事情をより具体的にするには、それらの政治的・外交的立場も明らかにする必要がある。

景德王11年（752）の新羅の国内政治の舞台において最高の官職にあったのは、金思仁である。金思仁は、景德王4年（745）に上大等に就任して以後、景德王16年（757）正月に病気で退任する時までその地位にあった。金思仁の政治的立場については、彼の退任直後漢化政策が一層強化されたとして景德王の改革に反対する反専制主義勢力の一員とみなす見解もあった³⁴⁾。しかしながら金思仁は、前述のように権力を掌握しており、死去するまで景德王のもとで漢化政策及び官制改革を推進し王権強化をめざしていたと推察される³⁵⁾。これについては、次の756年の『三国史記』の記録が注目される。

十五年春二月，上大等金思仁，以比年災異屢見，上疏極論時政得失。王嘉納之。（『三国史記』卷9景德王15年〈756〉春2月条）

金思仁が景德王に時政得失（この時の政治の得失）を厳しく論じ、王がこれを嘉納している様子からも、彼を王党派勢力の一員とみなす見解が妥当であろう。また後者の見解では、景德王代初・中盤に、彼が金順貞家門の政治勢力と対立しながら反日的な外交政策を実施したともされた³⁶⁾。ただこの見解に立つと、景德王11年(752)に大規模使節団を日本に派遣した理由を説明することができないのも事実である。したがって、金思仁の立場は、憶測の域を出るものでないが王党派に所属した人物でありながらも、前者の見解にも留意しつつ反専制主義勢力ともある程度良好な関係を保っていた、中道派とみておくのがひとまず妥当なところであろう。

いずれにしても、前述のような国内政治のもとで新羅王権が王子を含む大規模使節団を日本に派遣した背景には、最高官職の上大等である金思仁などの関与なしでは不可能であったと考えられる。すなわち、景德王を中心とした王党派勢力が政治の主導権を握る中、反専制主義勢力が要望した使節団の日本派遣を実現できるよう、上の時政得失のようにわざわざ景德王に意見陳述を行った可能性を想定してみることもできる。

ところで、金思仁は、早く聖徳王35年(736)に平壤州・牛頭州を視察³⁷⁾した経験を持ち、上大等に就任後の景德王7年(748)には、北方視察を命じて大谷城以下十四郡県の設置³⁸⁾を主導している。このように北方地域の経営拡大に精力を注いだ金思仁は、対渤海政策に関与した中心人物とも評価された³⁹⁾。特に酒寄雅志氏は、本題である金泰廉の日本派遣も金思仁の対渤海政策によるものであったとし、渤海との緊張関係のため新羅は日本の中華思想に迎合してまで朝貢したと論じた⁴⁰⁾。

このような見解に対しては、直接否定できる根拠は持ち合わせていないが、かりに新羅が渤海に対する保全策のため日本の要求を受け入れて使臣を派遣したとすれば、前述した『三国史記』景德王12年(753)秋8月条のように、その翌年に返礼として遣わされて来た日本使を傲慢で無礼であっても面会すらせず帰したりはしなかったであろう。この時期の新羅にとって、渤海対策は重要な課題であったが、その脅威は日本からの支援を必要とするほどではなかったと推察される。また、日本派遣に渤海の動向が関係したとしても、その理由のために700人規模の使節団を派遣する意味も見当たらない。なお、752年以降、渤海は日本に対して一層活発な接触を試みるようになるが、新羅がそれに合わせて700人規模の使節団を日本に送ることもしていない。改めて、王子金泰廉一行の日本派遣事情には、そのような国際的環境よりは新羅国内の政治状況がより深く関わっていたことを実感させられる。

(2) 派遣目的と景德王の対応

上のように金泰廉の日本派遣には、反専制主義勢力の積極的関与に加えて、金思仁をはじめとする政府中枢にいた人物たちの協力もあった。それならば、反専制主義勢力が対日外交を要請した理由並びにこれを許諾した景德王の意図についても、検討しなければならない。

まずその前に、使節団の性格とも関わる王子金泰廉の身分について簡単に言及しておきた

い。金泰廉の官位は第5位の大阿浪であったが、既存の研究でも彼が実際の王子であったかは疑問視されている。『三国史記』には、景德王17年(758)に彼の最初の王子が誕生したと記録⁴¹⁾されているからである。ゆえに金泰廉を仮王子とみなす見解⁴²⁾もあったが、当時の外交では王子と称しても実際には王族や支配階層の人物がこれを代行する場合があります、金泰廉の身分を特定することは容易でないとされた⁴³⁾。

ここでもそれ以上詳細に言及する準備はないが、『三国史記』巻8聖徳王32年(733)冬12月条に、聖徳王の甥に金志廉という名前が確認される点などを指摘しておく。名前より推測すれば、金泰廉は金志廉の兄弟の間柄であった可能性を想定でき⁴⁴⁾、それならば景德王とは従兄弟関係になるのである。他方、前述のように景德王は、後継者である嫡子の誕生に多大な関心があった反面、それ以外の王子には無関心であったことから、史料にはみられなくとも嫡子ではない王子が存在した可能性は十分想定される。ともかく金泰廉は、王子と称していても景德王とはいくらか距離があったと言える。つまり、金泰廉も反専制主義勢力の代表的人物であり、彼が日本に派遣された意味もここにあると考えられる。

では、反専制主義勢力の対日外交の目的であるが、まず700人余という大規模使節団を派遣するには、それ相応の経済力と政治的立場を必要とした。前章では、皇龍寺鐘を鑄造した際に三毛夫人と孝貞が多量の銅などを喜捨した点に注目し、反専制主義勢力(真骨貴族)が莫大な財貨を所有していたことを確認した。また、真骨貴族が豊富な財源を確保できた背景には、大土地経営及び自身の家産工房での製品生産など様々な要因が指摘されている⁴⁵⁾。『三国遺事』巻1紀異2辰韓条には新羅全盛期の新羅王京内に富潤大宅である35の金入宅が存在したと記すが、これらは8世紀中葉まで遡りうる可能性が高いという⁴⁶⁾。特に李成市氏の研究により、彼らの家政機関には国家や王室と同等規模の工房があり、有能な工匠が所属して高度な手工業生産が行われていたことが具体的に証明された。

そして、それらの工房で生産された製品類は、遠く日本などに輸出されていたのである⁴⁷⁾。金泰廉一行の渡日の際に日本側が新羅との交易で得た物品については、日本の東大寺正倉院に伝わる「買新羅物解」によって確かめられる。これは、日本の王族・貴族によって新羅製品を購入するために、金泰廉が天皇に謁見した直後の6月15日から7月8日までに関係官司に提出された申請文書である⁴⁸⁾。さらに、同じく正倉院に所在する8世紀中葉の新羅文物のひとつ毛氈に付された次の貼布記には、

紫草娘宅紫称毛一 念物糸乃綿乃得 追于 今綿十五斤小 長七尺広三尺四寸 (「色氈貼布記」)

金入宅と関係深い紫草娘宅の名前がみられる。真骨貴族の工房で製造された毛氈などの製品が、日本に輸出されていたことが直接知られるようになったのである⁴⁹⁾。真骨貴族たちは8世

紀中葉（752年段階）において、国家と同じ規模の家政機関を所有しただけにとどまらず、対日交易など外交活動を推し進めるまでの立場にあったと考えられる。

こうした真骨貴族たちの対日外交参加及び金泰廉に同行した700人の性格については、既存の研究でも指摘された。いくらかの見解の違いはあるが、政治・外交的な意味を重視した見解においてもそれらを交易活動者（商人）とみなし、752年の対日外交を交易活動と関連させて考えている点は一致する。

そこで、このような既存の見解に、これまで論じた景德王ら王党派と反専制主義勢力の関係から垣間見られる当時の新羅国内の政治状況を勘案すれば、金泰廉一行の日本派遣事情をめぐる核心部分が一層明らかとなるだろう。すなわち、752年の対日外交には、両者の激しい駆け引きがあったと考えられる。特に反専制主義勢力は、前述のように経済的基盤をより一層拡大させるために、自身の工房で製造した手工業製品を日本でも交易しようと、対日外交を積極的に要望したとみられる。これに対し王党派は、当然その実施の当否が問われたであろう。景德王側としては、対唐政策を通じた王権強化を基本方針に置きながらも、独自の基盤を持った反専制主義勢力を王権の下に懐柔するために、対日外交を承認するほかなかったというのが実情だろうと考えられる。

最後に、752年の使節団派遣が反専制主義勢力と景德王の妥協により成し遂げられたとすれば、上のような現実的な目的を超えて両者が納得し合える何らかの名目があったのではないか。これを知る上で、注2)-④にみえる、金泰廉一行が752年6月22日に礼仏のために大安寺と東大寺を訪問したことが喚起される。このことは、正倉院文書である「自所々請来経帳」（12ノ288）・「写書所問写経疏目録」（12ノ296）に、金泰廉一行が両寺院を訪問したまさに同日に、新羅使人が東大寺写経所に法花経・梵網経・頭陀経の借用を申請したと記録していることから確かめられる⁵⁰⁾。また、この前の752年4月には東大寺の大仏開眼に伴う行事が催されており、最初に触れたように田村圓澄氏は、金泰廉派遣の最大の目的は東大寺参拝にあったとしている⁵¹⁾。

これまで論じたように、金泰廉一行の日本派遣の真の目的が東大寺参拝にあったとは考えられないが、それらが日本に到着後の訪問予定地のひとつに入っていたことは相違ない。付け加えれば、金泰廉一行が真っ先に大安寺に向かったことが注目される。大安寺には、日本華嚴宗の最高指導者であって新羅学問僧の経歴を持つ審詳⁵²⁾がいたためである。既存の研究でも強調されているように、景德王代の王室及び真骨貴族をはじめとする新羅王京人は、華嚴宗の信仰に積極的であったのである⁵³⁾。何より金泰廉が述べたとみられる注2)-②下線部の普天之下は、華嚴経の法界を示す文句であり、彼ら一行と華嚴宗の関係を窺わせる⁵⁴⁾。つまり、使節団を日本に派遣した際に東大寺や審詳のもとを訪問させた行為は、新羅の国内政治に散在した様々な意見をもつ勢力をひとつに結束させるのに一定の役割を果たしたと考えられる。

おわりに

本稿では、景德王11年(752)に王子金泰廉など700人余が日本に派遣された事情について、既存の研究のように日本側の国内事情や渤海との関係など外的な要因よりは、派遣を決定した主体である景德王をはじめとする新羅王権の立場から検討した。それにより、当時の新羅政府内では景德王を筆頭とする王党派とそれに対抗する反専制主義勢力(真骨貴族)の対立があったが、752年の対日外交は、特に反専制主義勢力の要請が深く関与したことを明らかにした。以下、本文で論じた内容を簡単に要約すれば次のようである。

まず、景德王は、父である聖徳王の政治を理想としながら対唐(漢化)政策を継承し、それによる官制改革を断行することで王権強化を成し遂げて、彼に反対する貴族勢力を抑圧した。それに伴い、外交面においても、日本など周辺諸国より優位に立つ姿勢を明白にしたと言える。したがって、752年の時期に、景德王を中心とする王党派が日本に積極的に朝貢したとは考えられないのである。

また、景德王代の政治状況を考える上で、それに不満を持った真骨貴族である反専制主義勢力の動向が注目される。例えば景德王13年(754)に铸造された皇龍寺鐘は、そのひとりである孝貞と三毛夫人の施主によって完成されており、彼らの財貨の蓄積程度を窺わせる。加えて、金順貞とその孫金邕の例から明らかのように、反専制主義勢力は親日的な外交姿勢を、王党派の推進する対唐政策に対抗する手段として継承・利用していた。

このように、752年の金泰廉一行の日本派遣は、経済力を有した反専制主義勢力の要請により推進されたのであった。ただ、700人余の大規模使節団を派遣できたのには、政府中枢にいた人物の協力もあったと考えられる。745年から757年まで上大等にあった金思仁は、王党派に所属したが反専制主義勢力とも良好な関係を維持した中道派のようである。そのような人物が、使節団を日本に派遣できるよう景德王に建議したと想定してみることができる。

とすれば、反専制主義勢力が対日外交を要請した理由と景德王がそれをひとまず許諾した目的はどこにあったのか。この頃、反専制主義勢力は多くの経済的基盤を背景に、自身の工房で製造した手工業製品を日本にも交易しようと、対日外交を積極的に望んだと考えられる。これに伴い、景德王側では、対唐政策による王権強化を基本方針としながらも、独自の基盤を持った彼らを王権の下に懐柔するために、対日外交を承認したのである。なお最後に、752年の対日外交には政府内で意見対立があったが、彼らが結束して使節団を派遣するのには、当時の新羅王京人たちが信奉した華嚴宗を通じた仏教交流を名目としたと推察される。

注

- 1) 研究史の整理は、金恩淑「8世紀の新羅と日本の関係」(『国史館論叢』29, 1991)・金恩淑「日本との関係」(『韓国史9・統一新羅』国史編纂委員会, 1998)・沈京美「新羅中代の対日関係に関する研究」

(『統一新羅の対外関係と思想研究』白山資料院, 2000)・延敏洙「統一期新羅と日本との関係」(『講座韓国古代史4』駕洛国史蹟開発研究院, 2003)・金善淑『新羅中代対日外交史研究』(韓国精神文化研究院博士学位論文, 2007)などを参照。

- 2) 『続日本紀』にみられるこの後の新羅王子金泰廉に関わる記録は次のようである。
 - ①乙亥, 遣使於大内山科恵我直山等陵, 以告新羅王子来朝之状。(『続日本紀』卷18天平勝宝4年〈752〉閏3月乙亥条)
 - ②六月己丑, 新羅王子金泰廉等拜朝。并貢調。因奏曰, 新羅国王言日本照臨天皇朝廷。新羅国者, 始自遠朝, 世世不絶, 舟楫並連, 来奉国家。今欲国王親来朝貢進御調。而顧念, 一日无主, 国政弛乱。是以, 遣王子韓阿浪泰廉, 代王為首, 率使下三百七十余人入朝, 兼令貢種種御調。謹以申聞。詔報曰, 新羅国, 始自遠朝, 世世不絶, 供奉国家。今復遣王子泰廉入朝, 兼貢御調。王之勤誠, 朕有嘉焉。自今長遠, 当加撫存。泰廉又奏言, 普天之下, 無匪王土, 率土之滨, 無匪王臣。泰廉, 幸逢聖世, 来朝供奉, 不勝欽慶。私自所備国土微物, 謹以奉進。詔報, 泰廉所奏聞之。(『同』天平勝宝4年〈752〉6月己丑条)
 - ③是日, 饗新羅使於朝堂。詔曰, 新羅国来奉朝廷者, 始自氣長足媛皇太后平定彼国, 以至于今, 為我蕃屏。而前王承慶大夫思恭等, 言行怠慢, 闕失恒礼。由欲遣使問罪之間, 今彼王軒英, 改悔前過, 冀親来庭。而為顧国政, 因遣王子泰廉等, 代而入朝, 兼貢御調。朕所以嘉欽勤款, 進位賜物也。又詔, 自今以後, 国王親来, 宜以辞奏。如遣余人入朝, 必須令齋表文。(『同』天平勝宝4年〈752〉6月壬辰条)
 - ④丁酉, 泰廉等就大安寺東大寺礼仏。(『同』天平勝宝4年〈752〉6月丁酉条)
 - ⑤戊辰, 泰廉等還在難波館。勅遣使, 賜繩布并酒肴。(『同』天平勝宝4年〈752〉7月戊辰条)
- 3) 先駆的な研究は, 鈴木靖民「日本律令国家の成立・展開と対外関係」「日本律令国家と新羅・渤海」「奈良時代の対外意識」(『古代対外関係史の研究』吉川弘文館, 1985)である。鈴木氏は, 752年の金泰廉の日本派遣をはじめ, 8世紀以後悪化しつつも新羅が日本に使節を派遣し続けた要因を, 交易という経済的側面と渤海の脅威という外交的側面の両輪から論じた。この鈴木氏の研究は, 多くの研究者に影響を与え, 若干の批判はありながらもこれまで継承されたといえる。とはいえ, 新羅王権の立場よりみれば, また異なる側面も明らかになるのではないかと考える。
- 4) 代表的な研究には, 東野治之「正倉院託の墨書と新羅の対外交易」(『正倉院文書と木簡の研究』塙書房, 1978)・東野治之「正倉院文書からみた新羅文物」(『日本のなかの朝鮮文化』47, 1980)・浜田耕策「中代・下代の内政と対日本外交—外交形式と交易をめぐる—」(『新羅国史の研究』吉川弘文館, 2002a)・石井正敏「八・九世紀の日羅関係」(『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館, 1987)・石井正敏「天平勝宝四年の新羅王子金泰廉来日の事情をめぐる」(『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館, 2001)などがある。これらの研究によれば, 日羅関係は8世紀中葉の752年を前後する時期から, 政治色の強い公的な側面を次第に失い, 交易活動を中心とする経済重視の外交に移行したという。このような見解は, 日本のみならず韓国の学界にも大きな影響を与えている(金恩淑前掲論文1998)。近年の韓国での研究成果には, 尹善泰「752年新羅の対日交易と買新羅物解」(『歴史と現実』24, 1997)・金昌錫「8世紀の新羅・日本間における外交関係の推移—752年の交易の性格に対する検討を中心に—」(『歴史学報』184, 2004)・永正美嘉「新羅の対日香葉貿易」(『韓国史論』51, 2005)などがある。
- 5) 酒寄雅志「八世紀における日本の外交と東アジアの情勢—渤海との関係を中心として—」(『渤海と古代の日本』校倉書房, 2001)。また, 韓国での研究成果には, 趙二玉「8世紀中葉の国際情勢と対渤海外交」(『統一新羅の北方進出研究』書景文化社, 2001)・朴真淑「対日本外交の成立過程」(『渤海の対日本外交研究』忠南大学校博士学位論文, 2001)などがある。
- 6) 李成市『東アジアの王権と交易』(青木書店, 1997)。
- 7) 李成市氏は, 金泰廉来日の3ヶ月前の752年1月25日に山口忌寸人麻呂が遣新羅使に任命された記録に注目し, その直後に彼らが新羅に赴き日本側の要請を伝えた想定した(李成市前掲著書, 89頁)。ただ, この見解については, 日羅間の往来日数などを詳細に検討した石井正敏氏によると, 依頼を受けたのち3ヶ月で700人規模の使節を送るのは不可能であったという(石井正敏前掲論文2001, 49~50頁)。また, 羅日外交の中で新羅が日本側の要請を受託して日本に使節団を送った例もなく, いくらか疑問を感じざるを得ない。

- 8) 田村圓澄「新羅王子金泰廉の東大寺参拝」(『古代日本の国家と仏教』吉川弘文館, 1999)。また、最近の韓国における研究成果である、金善淑「新羅景德王代(742～765)の国内外情勢と対日外交」(『軍史』62, 2007)・金志垠「景德王代の対日外交—752年の交易の性格を中心に—」(『新羅文化』30, 2007)も、752年の金泰廉一行の派遣を、当時の新羅と日本の間で展開した華嚴宗を中心とする仏教交流の中に位置づけて論じている。
- 9) 全徳在「新羅中代における対日外交の推移と真骨貴族の動向—聖徳王～恵恭王代を中心に—」(『韓国史論』37, 1997)は、新羅政治史、特に真骨貴族の動向に留意しながら新羅中代後期の対日外交を論じた数少ない研究成果である。しかし、この論稿でも景德王代の対日外交については、760年以降の金邕の活動と関連して扱っているのみで、752年の金泰廉の日本派遣には全く触れていない。
- 10) 先駆的な研究は、李基白『新羅政治社会史研究』(一潮閣, 1974)である。李基白氏は、新羅政治史の展開過程を、貴族連合(新羅上代)→専制主義(新羅中代)→貴族連立(新羅下代)と提起した。新羅中代を専制政治とみる学説については、時代区分及び用語(「専制主義(専制王権)」・「王党派」あるいは「貴族たちの反専制主義(反専制主義勢力)」)を含めて、批判されることもあった。しかし、李基白氏が「新羅専制政治の成立」「統一新羅時代の専制政治」「新羅専制政治の崩壊過程」(『韓国古代政治社会史研究』一潮閣, 1996)で的確に再論しているように、現在までの新羅史研究においてそれを実証的に批判した見解はない。本稿でも、李基白氏の研究にならない、そうした概念・用語をそのまま使用する。
- 11) 景德王代の政治史を扱った研究には、李基白「景德王と断俗寺・怨歌」前掲著書をはじめ、申滢植「新羅中代専制王権の展開過程」(『統一新羅史研究』三知院, 1990)・李泳鎬『新羅中代の政治と権力構造』(慶北大学校博士学位論文, 1990)・金寿泰「真骨貴族勢力の政権掌握と金邕」(『新羅中代政治史研究』一潮閣, 1996)・朴海鉉「新羅景德王代の外戚勢力と王権の動揺」(『新羅中代政治史研究』国学資料院, 2003)・申政勳「景德王の即位と王権強化策の推進」(『8世紀の新羅の政治と王権—8世紀の新羅の政治的推移と天災地変の性格—』韓国学術情報, 2010)などがある。
- 12) 詳細は注11)論文を参照。
- 13) 『三国遺事』卷1王暦第35景德王条。
- 14) 金寿泰前掲論文・朴海鉉前掲論文を参照。また金寿泰氏の研究によれば、上の金邕が反専制主義的な性格を持ったのは、三毛夫人の出宮など景德王代の王権強化策が関係したという(前掲論文, 111～114頁)。
- 15) 李基白前掲論文, 217～218頁。
- 16) 『三国史記』卷9景德王2年(743)3月条。
- 17) 趙二玉前掲論文, 139～146頁。
- 18) 金寿泰前掲論文, 117～118頁。
- 19) 詳細は申政勳前掲論文, 88～98頁を参照。また景德王代の官制改革については、木村誠「統一新羅の官僚制」(『古代朝鮮の国家と社会』吉川弘文館, 2004)・李文基「統一新羅の地方官制研究」(『国史館論叢』20, 1990)などを参照。
- 20) 金邕の外交的立場は、既存の研究によって親日的であったことが明らかにされている(全徳在前掲論文, 32～34頁)。
- 21) 浜田耕策「聖徳大王神鍾と中代の王室」前掲著書, 183～184頁など。
- 22) 詳細は、浜田耕策「聖徳大王の政治と外交」前掲著書b・趙二玉「新羅聖徳王代の対唐外交政策研究」(『梨花史学研究』19, 1990)・李基東「新羅聖徳王代の政治と社会—君子国の内部事情—」(『歴史学報』160, 1998)などを参照。
- 23) 金恩淑前掲論文1991, 117～119頁を参照。
- 24) 金邕については、金寿泰前掲論文を参照。
- 25) 金寿泰前掲論文, 114頁・申政勳前掲論文, 43～44頁。
- 26) 郭丞勳「中代末期における貴族勢力の仏事活動」(『統一新羅時代の政治変動と仏教』国学資料院, 2002, 54～55頁)。
- 27) 新羅国使礼府卿沙浪金三玄已下二百卅五人, 到泊大宰府。遣河内守従五位上紀朝臣広純大外記外従五位下内蔵忌寸全成等, 問其来朝之由。三玄言曰, 奉本国王教, 請修旧好每相聘問。并将国信物及在唐

大使藤原河清書來朝。問曰、夫請修旧好每相聘問者、乃似亢礼之隣。非是供職之國。且改貢調、稱為國信。變古改常。其義如何。對曰、本國上宰金順貞之時、舟楫相尋、常脩職貢。今其孫邕、繼位執政、追尋家聲、係心供奉。是以、請修旧好每相聘問。又三玄本非貢調之使。本國便因使次、聊進土毛。故不稱御調。敢陳使旨。自外不知。於是、勅問新羅入朝由使等曰、新羅元來稱臣貢調、古今所知。而不率旧章、妄作新意、調稱信物、朝為脩好。以昔准今、殊無礼数。宜給渡海料、早速放還。

- 28) 惠恭王代（765～780）の対日外交は、浜田耕策「対日本外交の終幕一日唐間の情報と人物の中継ぎをめぐって」前掲著書・石井正敏前掲論文1987・全徳在前掲論文・金善淑「新羅惠恭王代（765～780）の国内外情勢と対日外交」（『精神文化研究』109, 2007）などを参照。
- 29) 浜田耕策前掲論文b, 128～129頁。なお王党派は、金順貞の死を契機に対唐関係を一層強化したと考えられる。
- 30) この時の日本使節は、『続日本紀』天平勝宝5年（753）2月辛巳条で遣新羅使に任命されている少五位下小野朝臣田守である。
- 31) 既存の研究では、『続日本紀』の王子金泰廉の来日関係記事によって、この頃の日羅間は友好関係にあったとされた。しかしこれらは、新羅の国内事情を考慮しておらず、景德王自身の対日認識・態度とかけ離れていたと考えられる。
- 32) この事件については、金恩淑前掲論文1991, 124～125頁・森公章「古代日本における対唐観の研究 一対等外交と国書問題を中心に一」（『古代日本の対外認識と交通』吉川弘文館, 1998, 38～42頁）などを参照。
- 33) 李成市前掲著書, 87頁。
- 34) 郭丞勳前掲論文, 55～56頁など。
- 35) 全徳在前掲論文, 32～33頁・申政勳前掲論文, 78～79頁。
- 36) 全徳在前掲論文, 32～33頁。
- 37) 『三国史記』卷8聖徳王35年（736）冬秋11月条。
- 38) 『三国史記』卷9景德王7年（748）秋8月条。
- 39) 酒寄雅志前掲論文, 205～207頁・趙二玉前掲論文, 52～54頁。
- 40) 酒寄雅志前掲論文, 211～212頁。
- 41) 『三国史記』卷9景德王17年（758）秋7月23日条。
- 42) 浜田耕策前掲論文a, 346～348頁。浜田氏は、大阿浪の官位についても日本派遣に先立ち特別に与えられた可能性が高いという（前掲論文, 347頁）。
- 43) 李成市前掲著書, 87頁など。
- 44) 金恩淑前掲論文1991, 123頁。
- 45) 李基東「新羅金入宅考」（『骨品制社会と花郎徒』一潮閣, 1978）・朴南守『新羅手工業史』（新書院, 1996）・李成市前掲著書・李仁哲「新羅の経済体制とその運営」（『新羅政治経済史研究』一志社, 2003）など。
- 46) 李基東前掲論文1978, 186頁。
- 47) 詳細は、東野治之前掲論文1978・李成市前掲著書・尹善泰前掲論文・金昌錫前掲論文などを参照。
- 48) 具体的な内容は、金昌錫前掲論文, 14～15頁を参照。
- 49) 東野治之前掲論文1978・李成市前掲著書・尹善泰前掲論文などを参照。なお、その記録にみえる「綿十五」は、日本側が毛氈を購入した際の代価である（李成市前掲著書, 53頁）。
- 50) 詳細は田村圓澄前掲論文, 429～431頁を参照。
- 51) 田村圓澄前掲論文。
- 52) 凝然の『三国仏法伝通縁起』では、審詳を新羅学生とし新羅華嚴宗の後継者とみなしている（田村圓澄「唐・新羅・日本の華嚴教」前掲著書, 204～207頁）。審詳を扱った専門的な研究には、堀池春峰「華嚴経講説よりみた良弁と審詳」（『南都仏教史研究上』法蔵館, 1980）がある。
- 53) 詳細は、金杜珍「統一新羅の歴史と思想」（『韓国思想史体系2』韓国精神文化研究院, 1991）・郭丞勳「景德王の政治改革と仏事活動」前掲著書などを参照。
- 54) 最近の研究でも金善淑前掲論文・金志垠前掲論文は、王子金泰廉の派遣をめぐって、華嚴宗を中心とした仏教との関係を重視している。

The Delegation to Japan of Silla's Prince Kim Taeryum and Silla King Gyeongdeok

—Domestic Politics as the Reason for the Delegation—

Koichi KONDO

Contents

Introduction

1. King Gyeongdeok's Enforcement of the Authority of King in Silla and the Policy against the Tang Dynasty
2. The Movement of the Group Opposing Absolutism and the Diplomatic Relationship with Japan
3. King Gyeongdeok's Conciliatory Measure and Kim Taeryum's Dispatch to Japan
 - (1) Kim Sain's Activity and the Diplomatic Relationship with Japan
 - (2) The Envoy's Objective and King Gyeongdeok's Reaction

Conclusion

Keywords: King Gyeongdeok, Prince Kim Taeryum, the Delegation to Japan, Silla's Domestic Politics, the Group Opposing Absolutism